

紙芝居 アジアで共感

世界で講座「文化の会」野坂悦子さん寄稿

紙芝居は、日本で生まれた文化であることをい存じだろうか。私は「紙芝居文化の会」の海外担当として、15年近く、世界各国で紙芝居講座をコーディネートしている。

ここ数年はとくにアジアで、紙芝居について本格的に知りたいという声が高まってきた。たとえばマレーシアでは、「国際児童図書評議会マレーシア支部」(MBBY)が主催となり、2012年より3回にわたって、講座が開かれた。さらに今年4月、中国からの熱心な招きを受けて、絵本作家の和歌山静子氏、とよたかずひこ氏をはじめ、童心社と紙芝居文化の会のメンバー13人が現地



のさか・えつこ 1959年東京都生まれ。オランダ語を中心に児童文学や絵本の翻訳を手掛ける。主な翻訳に「ぼくとメスの秘密の七日間」。紙芝居の創作に「やさしいまものバッパー」がある。

中国・マレーシアで演じ手活動 命尊ぶ意識 共有

向かった。

「日中子どもお話の花畑」と「新読研究」が、上海と北京で共催した紙芝居講座には、3日

間でのべ300人を超え参加者があった。急激な経済成長を遂げた中国では、物質だけでは幸福になれないことを知った人たちが、「何か」を求めている。その何かが、絵本だけでなく紙芝居の中にもあるのを感じまし

た」と参加者は語る。講座の後、中国でもマレーシアでも演じ手のグループができ、活動が始まったという。

私たちが世界中に伝えるのは、「共感」の文化としての紙芝居だ。絵が1枚ずつ抜かれて物語が進む時、観客には紙芝居舞台の中から外へ絵が出るのが見え、作品の世界が現実の空間にまで広がるように感じられる。

演じ手はかならず観客と向かい合い、作品の世界を通してコミュニケーションし、そこに共感の喜びが生まれる。いま、みんなと、ここに生きていくことがうれしくなる。それは教育学者大田堯氏のいう「自分の命を大事にし、同時に仲間の命を大事にし、地球上の他の生物の命を大事にする」ことにつながっていて、優れた紙芝居作品はどれも奥底にそんな光を秘めている。

日本をはじめとするアジアの多くの国では、19世紀より社会の近代化(西洋化)が外からの力で押し進められた。でも人々の心には自然と人を区別せず、すべての命を尊ぶ意識の古層がまだ残っているように思う。だからこそ紙芝居による共感が、砂地に水がしみるように広がり、もっと紙芝居を演じたい、創りたいという動きになっているのだろう。

アジア太平洋戦争の時代、戦意高揚の手段として日本は紙芝居を利用した。そんな歴史も忘れずに、アジアの人たちと一緒に、新しい共感の文化地球の命を尊ぶ文化としての紙芝居を考えることには、大きな意味がありそう。

上海の幼稚園で、大型紙芝居を演じる絵本作家のとよたかずひこ氏(左) 4月(紙芝居文化の会提供)



(翻訳家、紙芝居作家)